

季節の歌セクション

百人一首から選んだ季節の歌10首

15番

君がため春の野に出でて若菜摘むわが衣手に雪は降りつつ

【現代語訳】あなたのために春の野に出て若菜を摘む、その袖に雪が降りかかっている春。あなたのために春の野で若菜を摘む、その袖に雪が降りかかる早春の情景。

33番

ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ

【現代語訳】のどかな光の春の日に、なぜ桜は落ち着きなく散り急ぐのだろうか春。穏やかな春の光の中で、なぜ桜は落ち着きなく散り急ぐのだろうか。

61番

いにしへの奈良の都の八重桜けふ九重ににほひぬるかな

【現代語訳】昔の奈良の都の八重桜が今日は宮中で美しく咲き誇っている春。昔の奈良の都の八重桜が、今日は宮中で美しく咲き誇っている。

36番

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月宿るらむ

【現代語訳】夏の夜はまだ宵のうちに明けてしまった。月はどの雲に宿っているのだろう夏。夏の夜は短く、まだ宵のうちに明けてしまう。月はどの雲に隠れたのか。

81番

ほととぎす鳴きつる方をながむればただ有明の月ぞ残れる

【現代語訳】ほととぎすが鳴いた方を見れば、ただ有明の月だけが残っていた夏。ほととぎすが鳴いた方を見れば、もう鳥はおらず有明の月だけが残っている。

1番

秋の田のかりほの庵の苫をあらみわが衣手は露にぬれつつ

【現代語訳】秋の田の仮庵は屋根の苫が粗いので、私の衣の袖は露に濡れ続けている秋。秋の田の仮小屋の屋根が粗いので、袖が露に濡れ続ける。

5番

奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の声聞く時ぞ秋は悲しき

【現代語訳】奥山で紅葉を踏み分けて鳴く鹿の声を聞くと、秋はことに悲しい秋。奥山で紅葉を踏み分け鳴く鹿の声を聞くと、秋の悲しさが身にしみる。

87番

村雨の露もまだ干ぬまきの葉に霧立ちのぼる秋の夕暮

【現代語訳】にわか雨の露もまだ乾かない真木の葉に、霧が立ちのぼる秋の夕暮れ秋。にわか雨の露がまだ乾かない真木の葉に、霧が立ちのぼる秋の夕暮れ。

4番

田子の浦にうち出でてみれば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ

【現代語訳】田子の浦に出てみると、富士の高嶺に白く雪が降り積もっている冬。田子の浦に出てみると、富士の高嶺に白く雪が降り積もっている。

6番

かささぎの渡せる橋に置く霜の白きを見れば夜ぞ更けにける

【現代語訳】かささぎが架けた橋に霜が白く置いているのを見ると、夜が更けたのだ冬。かささぎが架けた天の橋に霜が白く置いているのを見ると、夜が更けたのだ。